

# 幌向再生地の利活用について

平成27年12月21日

第4回石狩川下流幌向地区自然再生ワークショップ  
(略称:幌向再生ワークショップ)

# 目標とする自然景観

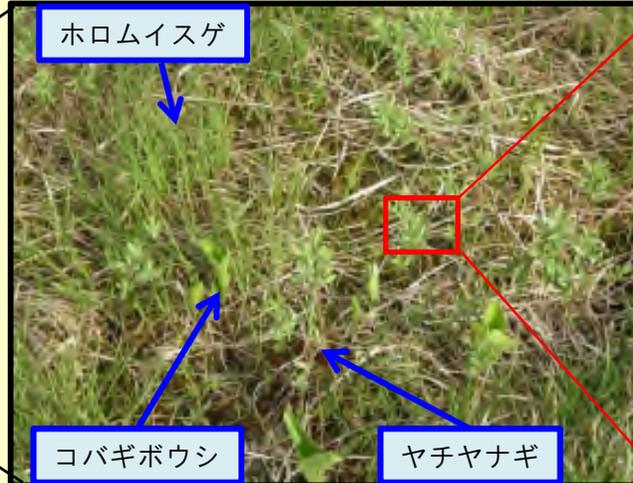
## 目標とする自然景観

サロベツ湿原の例（ボッグ湿原）



全体にはミズゴケ属やスゲ属、  
湿生のシダ植物等が優占する

ハンモック（ミズゴケ属が優占する小丘）の全景



ハンモック内の様子



堤防上からの眺め（H27. 4. 28撮影）



# 幌向再生地の利活用に向けて

## 整備後の湿原環境イメージ



## 利活用に向けた課題

目的	項目	利活用（案）	利活用に向けた取り組み（案）
幌向再生地の利活用 地域への還元	情報発信 PR	<ul style="list-style-type: none"> <li>●自然再生の取り組みのPR</li> <li>●ホロムイイチゴ等のノウハウを活かした地場産品としてのブランド化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ホームページの開設、ニュースレター等の配布</li> <li>□地場産品としての生産、商品化</li> </ul>
	環境学習 体験学習	<ul style="list-style-type: none"> <li>●地元小中学校、NPO活動による環境学習の場としての利用</li> <li>●環境学習等を通じたミズゴケ属の増殖</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>□地元小中学校のカリキュラムへの位置づけ</li> <li>□地元活動団体への情報提供</li> <li>□周辺市町村及び活動団体等への情報提供（広域からの集客）</li> <li>□一般市民ができるミズゴケ増殖方法の検討</li> </ul>
	景観 観光資源	<ul style="list-style-type: none"> <li>●自然観察（植物、昆虫、鳥類等）の場としての利用</li> <li>●景勝地、観光ルート等としての利用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>□自然観察等に必要な施設整備、利用ルールづくり</li> <li>□フットパス等の利用、南幌町・観光関連企業等との連携</li> <li>□幌向地区で見られる植物、昆虫、鳥類等の情報提供</li> </ul>

# 地域連携の取り組み事例（当別地区自然再生地区）

## 高校生によるトンボ類のモニタリング調査

- 当別地区のモニタリング調査の一環として、NPO主体で高校生の参加によるトンボ類のモニタリング調査を実施
- 調査は高校生のクラブ活動の一環として実施し、現地調査・データ取りまとめ・分析を行っている
- 当別地区のモニタリングデータとして蓄積されている一方で、高文連等の各種大会に参加し、優秀な成績を収めている
- 参加学校：札幌旭丘高等学校



**全日本科学教育振興委員会賞**  
札幌旭丘高生物部  
「トンボ相の多様性の変動」

札幌旭丘  
道審査会は最高の知事賞。部長の内田葉子さん(3年)は「中央審査でも、できる限りのことはやった。環境大臣賞を取りたかったと、ちょっぴり悔しさを覚えることで、工事が10年目に

**トンボ捕獲8000匹**  
「努力はNO1」

内田さんらは、当別町の沼で3年間に計44回の調査を行い、トンボ計8000匹を捕まえて種類を確認、すべて標本にした。湿地の再生工事の終了時期が異なる三つの沼の調査を比較すること、

まではトンボの個体数と種類が増え、その後、安定することなどを突き止めた。内田さんは北海道大の「AO入試」で今回の研究を発表し、見事に合格。一生涯の勉強を続けて大学院に進学したい」と夢を語った。1年の関口純子さんは「先輩の研究を受け継ぎ、さらに上の賞を狙いたい」と意気込んでいた。

標本や採集用の網を手にとり、受賞を喜ぶ札幌旭丘高生物部メンバーと綿路教諭(左)

## 小学生による植樹活動

- 当別地区の自然再生事業の一環として近隣地域の小学校の参加により、植樹活動を実施
- 植樹活動は、当別地区の柱の1つである樹林環境の再生に関するもの
- 活動は、タネ採り、苗育成、植樹の3つの工程で実施
- 植樹は、前年度までにタネ採り・苗育成したものを使用し、先輩が後輩に引き継ぐ形で継続化
- 参加学校：あいの里西小学校、西当別小学校

**石狩川下流当別地区自然再生 News Letter**  
水と生きもののつどい・イベント  
発行 平成25年7月29日  
石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ

**7/18 自然再生植樹(種取り種まき)**

**7月18日(木)** 今年もまた、大切な樹林環境の形成と環境教育を目的として、自然再生植樹のための種取りと種まきが小学生児童により行われました。先生から木の葉のとり方の注意を聞いたあと、グループに分かれて林に入り、大人に枝を下ろしてもらいながら木の実を取りました。そのあと小学校へ戻り取った木の実を使って、種の取り出し作業とまきつけ床の準備をしました。皆で協力して取り出した種を土を入れたまきつけ床にまき、名札をさして作業完了です。

この活動が行われたところ

日時：平成25年7月18日(木) 8:40～12:00  
参加対象：近隣小学校を対象とし総合学習の時間を活用(今年度はあいの里西小学校)  
場所：当別地区・石狩川公園周辺  
実施内容：現地での種採取、種取り出し、まきつけ床準備、種まき  
実施目的：樹林環境の形成に向けた活動の実施と環境教育  
協力団体：茨戸川環境市民フォーラム

# 地域連携の取り組み事例（当別地区自然再生地区）

## 地域勉強会の開催（フィールドワーク・ワークショップ）

- 当別地区再生事業における地域連携に向けた取り組みとして、再生事業を取り囲む川下地区の住民に声をかけ、勉強会を行っている。
- 平成24度には、当別自然再生地区の活用の試行として「当別地区自然再生地域勉強会・フィールドワーク編（都市と農村をつなぐ）」を実施し、後日、地域の方々に集まって頂いて報告会を行った。
- 主催：NPO法人 当別エコロジカルコミュニティ、協力：札幌河川事務所

**石狩川下流当別地区自然再生 News Letter**  
水と生きものの郷・ペツ  
発行：平成24年11月15日  
石狩川下流当別地区自然再生ワークショップ

当別地区自然再生事業勉強会：フィールドワーク編『都市と農村をつなぐ』  
当別川のカヌー下りと市川農場のグリーンアスパラ  
平成24年7月16日(月・祝)

一昨年より、当別地区再生計画を活かした地域おこしの勉強会を行ってきましたが、その中で話し合われた企画を試してみることになりました。

朝9時に子どもを含む15名の参加者がTEC事務所（旧川下小学校）に集まりました。前日に借りておいたカヌーを体育館より引き出し、川村さんのトラックに積み込んで神社横の河原から当別川にカヌーを降ろし、2人1組になって出発しました。ゆったりした流れに任せながら、カヌーを操ってゆきます。途中、2カ所の浅瀬ではカヌーを引っ張らなければなりませんでした。茂みにひそんでいたカモが慌てて飛び立ったり、岩ツバメの巣を横に見たり、川に水を飲みに来た牛に驚いたり、自然と一体になった1時間30分でした。次は市川農園のグリーンアスパラつみです。栽培のお話を聞いた後、丁寧に収穫しました。とりたてのアスパラガスでジンギスカンの昼食を食べながら感想を聞きました。

「カヌーで下ってみると、曇れ川のイメージではなかった。」「毎日見ている風景なのに、生活の視点でしか見ていないんだなあと思った。」「地元の子も経験させてやりたい。」「当別川の水があり、農家の人がいることで、おいしい農産物がある。その魅力をしっかり伝えていければと思った。」「北海道の川の中で、生活と自然を重ねて体験できる場所じゃないだろうか。」

パドルの使い方を練習します  
2人1組になって当別川に漕ぎだしました  
ゆったり流れていきます  
市川さんからアスパラの話を聞きます  
1本1本丁寧に収穫していきます  
とりたてのアスパラでジンギスカン

日時：平成24年7月16日(月・祝) 9:00-15:00  
参加者：15名(当別町8名、札幌市6名、岩見沢市1名)  
場所：当別川周辺  
実施スタッフ：川村幸広、川村俊宏、市川智大、山本幹彦

当別川自然再生事業／川下勉強会 第7弾

## 川下の魅力を再発見するワークショップ

川下のたからものを見つける・活かす

どこまでも続く青い空、澄んだ空気、色とりどりの豊かな自然、たくさん実ったお米や野菜。そんな誰もが懐かしむ美しい景色が、川下にはあります。それらを資源として見なおす取り組み、川下たからものプロジェクト。あたりまえのものを、あたりまえに。

2013/01/27 (日)  
14:00 ~ 16:00

参加費無料

内容：1) カヌーとアスパラ報告  
2) 川下地区のアライグマの現状報告  
【北海道大学大学院文学研究科  
人間システム科学科地域システム科学講座】  
3) 川下魅力発見ワークショップ

場所：旧川下小学校 (TEC事務所)  
主催：NPO法人  
当別エコロジカルコミュニティ  
申込み：0133-22-4305  
(当日の参加もOK！)

協力：札幌河川事務所  
後援：当別町

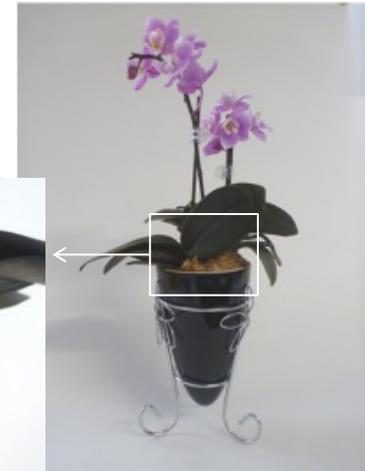
# ミズゴケ属の活用事例

## ミズゴケ属の活用

- ・農園芸資材（用土）、飼育材（昆虫等）、観賞用として利用されている。
- 特に、農園芸資材としては、胡蝶蘭の栽培に大きな需要がある。



ミズゴケ属



胡蝶蘭栽培への活用

## 《参考（生産性）》

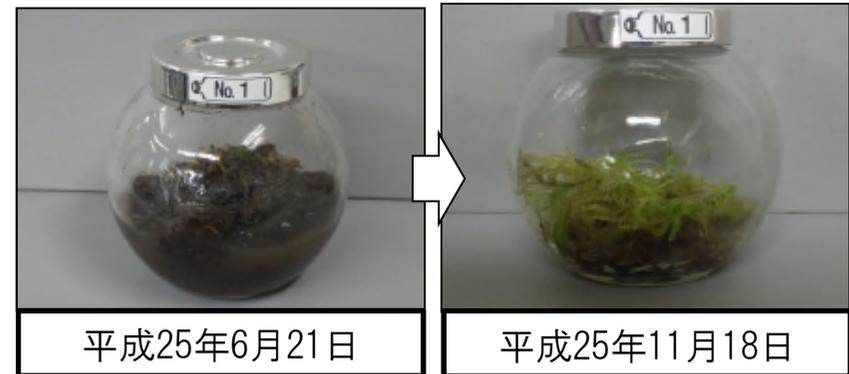
- ・東海大学の研究事例※では、年間のミズゴケ属の収量は30cm×30cmあたり乾燥重量で30g。
- ・乾燥ミズゴケの流通単価は2,000～4,000円/kg。  
（道内ホームセンターにおけるチリ産、ニュージーランド産販売価格）

$$\begin{aligned}
 & \begin{array}{c} 30\text{g}/0.09\text{m}^2 \\ 30\text{cm} \updownarrow \square \\ \quad \quad \quad \leftarrow 30\text{cm} \end{array} \rightarrow 33\text{kg}/100\text{m}^2 \times \begin{array}{c} 2,000 \\ \sim 4,000\text{円}/\text{kg} \end{array} \\
 & = \frac{66,000}{\sim 132,000\text{円}/100\text{m}^2}
 \end{aligned}$$



乾燥ミズゴケ

## 【札幌開発建設部での栽培試験】



平成25年6月21日

平成25年11月18日

# 湿生植物の活用事例

## ホロムイ七草の活用事例



ホロムイイチゴ

- ・ 飲食物（ジャム、ソース、ジュース、リキュール）、美容品（美容液、保湿クリーム、サプリメント）など多用途に加工され、利用されている（右写真）
- ・ 飲食物としては、特にフィンランドやスウェーデン、スコットランド、カナダにおいて利用されている。
- ・ 美容品としては、世界40カ国以上で販売されている保湿クリームの新しい原材料に採用された。



ジャム



リキュール



ホロムイツツジ

- ・ ツツジ科の近縁種は、観賞用として苗が流通している。ホロムイツツジは希少性が高いため、広く流通させる目的でインターネットで販売されることが多い。



ホロムイリンドウ

- ・ リンドウ科の近縁種は、観賞用として苗が流通している。ホロムイリンドウについても同様に、観賞用としての利用が考えられる。



保湿クリーム

ホロムイイチゴの活用事例